

飲み会でおっぴいの露出を強要された新入社員の話

宇芽歌は22歳で、入社3ヶ月目の新入社員。「清楚で可愛い」と評判で、小柄な体型の女の子だ。笑顔がチャームポイントで、男性社員の注目を密かに集めている。

陽子は28歳、営業部の先輩社員だ。グラマーな体型が目を引き、大人っぽい魅力がある。後輩から慕われていて、男性社員が多いこの会社でも堂々と振る舞っている。

宇芽歌が勤めるのは、東京の中堅IT企業。オフィスは新宿のビルの7階にあり、ガラス窓から夕陽が差し込む。営業事務の仕事で、契約書類の作成やデータ入力为主だ。朝8時50分に出勤し、デスクでモニターを立ち上げる。隣の山本(30歳、がっしり体型で短髪の営業マン)は10時過ぎに「おは

よう、昨日飲みすぎちゃってさ」と笑いながら着席。「おはようございます。お疲れですか？」と宇芽歌が返すと、「俺はタフだから平気。宇芽歌ちゃんこそ寝不足じゃない？」とニヤついた。宇芽歌は「いえ、大丈夫です」と笑顔で返した。

11時頃、同期の田中(25歳、眼鏡の穏やかなエンジニア)が「お茶淹れるけど、宇芽歌ちゃん飲む？」と聞いてくる。「ありがとう、いただきます」と返すと、「熱いから気をつけてね」と渡してくれた。昼休みは12時からで、弁当を持参した宇芽歌は休憩室へ。同期の佐藤(23歳、茶髪で明るい営業補佐)が「今日の弁当、唐揚げ多めにしたんだ。見てよ、美味そうだろ」と自慢。「美味しそう。私も真似しようかな」と宇芽歌が笑うと、「いいよ、俺が作り方教えてやるよ！」と張り切った。陽子が通りかかり、「お弁当いいね。私、コンビニのサンドイッチだよ」と笑顔で混ざり、「陽子さん、手作りしてみてくださいさ

いよ」と宇芽歌が言うと、「面倒くさいから無理！」と陽子が笑った。

午後は岡崎(35歳、細身で神経質そうな営業リーダー)から「この書類、今日中にチェックして。ミスんなよ」と指示が飛ぶ。鈴木(28歳、ムードメーカーの営業マン)が「岡崎さん、マジ仕事早いっすね。俺ら見習わなきゃ」と冗談を飛ばす。この日は金曜日で、17時を過ぎると緩い雰囲気。18時直前、岡崎が「みんなで飲みに行かねえ？仕事終わったし」と提案し、山本が「いいね、宇芽歌ちゃんも陽子さんも来いよ」とニヤついた。田中と佐藤が「行こうぜ」と乗り気で、陽子が「私も行くよ。宇芽歌ちゃんもおいで」と誘う。宇芽歌は「はい、行きます」と少し迷いながら答えた。

一行は駅前の居酒屋に移動。木のテーブルと赤い提灯が並び、焼き鳥の煙と醤油の匂いが混じる。奥の座敷に案内され、座布団に座る。宇芽歌は陽子の隣に座り、山本

が「とりあえずビールな！」と注文した。ジョッキが届き、「今週もお疲れ！乾杯！」と山本が掲げ、みんなが「乾杯！」と合わせた。宇芽歌は小さくジョッキを傾け、「冷たくて美味しい...喉乾いてた」と呟き、陽子が「ビール最高だよな。私、もう2杯目いっちゃうかも」と笑った。岡崎が「陽子さん、酒強いよな」と感心し、鈴木が「女でそれってすごえよ」と褒めた。

最初は仕事の話。岡崎が「今日の部長のプレゼン、スライド間違えてたよな。あれ何？焦ってんの見え見えだった」と愚痴ると、鈴木が「顔真っ赤で笑ったわ。途中で『えっと...えっと...』って、情けねえ」と付け加えた。田中が「でも山本さんがフォローしてくれて助かったよ。あのタイミングでクライアントに笑いもの入れといてさ」と褒め、山本が「俺がいないと営業部終わるからな。まあ、慣れてるけど」と肩をすくめた。宇芽歌が「ほんと、かっこよかったです。私、緊

張しちゃって何も言えなくて…」と素直に言うと、陽子が「山本のフォローなかったらヤバかったよね。宇芽歌ちゃんも頑張ってたよ」とフォローし、岡崎が「おお、宇芽歌ちゃんに褒められた！山本、調子乗るなよ」とからかって笑いが起きた。

話題が日常に広がる。佐藤が「最近『タコゲーム』にハマっててさ、3話目でビビったわ」と言うと、鈴木が「俺はアクション派だな。『マッドオックス』の爆発シーン最高だろ」と反論。宇芽歌が「私、ホラー好きで…『ミッドウィンター』見ました。最後まで怖かったです」と小さく言うと、山本が「おお、マジか！宇芽歌ちゃんがホラー好きってギャップやべえな！」と驚き、陽子が「私もホラー好きだよ。『リンク』見たとき、テレビの前で固まったもん」と共感した。田中が「俺、ホラー無理だわ。夜トイレ行けなくなって、電気つけっぱで寝た」と笑うと、佐藤が「お前、雑魚すぎだろ！」と突っ込み、座敷

が賑やかになった。焼き鳥が運ばれてきて、岡崎が「つくねうめえ！」と箸を動かし、宇芽歌も「美味しい...」と小さく食べた。

ビールが2巡目になると、みんなの声が大きくなり、陽子が「私、唐揚げ頼んでいい？」と聞くと、鈴木が「いいよ、俺も食う！」と賛成。唐揚げが届き、宇芽歌が「カリッとしてて美味しいですね」と言うと、山本が「宇芽歌ちゃん、もっと食べよ。細いんだからさ」と笑った。陽子が「私も食うよ。ダイエットもう諦めた」と豪快に頬張り、田中が「陽子さん、豪快で好きだわ」と感心した。雰囲気は和やかで、宇芽歌も「楽しい」と少し緊張が解けていた。

3杯目で空気が変わった。岡崎がニヤニヤしながら「なあ、宇芽歌ちゃんって彼氏いるの？」と切り出した。「えっと、いまはいないです」と宇芽歌が答えると、鈴木が「おお、可愛いのに勿体ねえな。モテるだろ？顔だけでいけるって」とからかい、山本が「じゃ

あ、経験人数何人だよ？正直に」と畳み掛けた。「えー、そんなこと聞かないでくださいよ...恥ずかしいです」と宇芽歌が笑ってかわそうとすると、岡崎が「何？照れてんの？可愛いなあ」とニヤつき、佐藤が「絶対モテるって。嘘つくなよ」と笑った。陽子が「やめなよ、宇芽歌ちゃん困ってるじゃん。プライベート詮索すんな」と止めたが、鈴木が「陽子さんは何人だよ？巨乳ならモテるだろ」と矛先を変え、陽子が「うるさいよ、私も言わねえ」と苦笑した。

岡崎が「何カップだ？宇芽歌ちゃん、Bくらいか？」とニヤつき、佐藤が「いや、Aじゃね？細いし」と笑った。山本が「おっぱいちっちゃいよな～。陽子ちゃんと全然大きさ違うよな」と言い、陽子が「ちょっと、やめてよ！」と手を振ったが、岡崎が「陽子ちゃんはEかFだろ？すげえ揺れてるもんな」とニヤつき、鈴木が「おお、マジで巨乳だよな。服の上からでも分かる」とゲラゲラ笑った。

宇芽歌は「やめてください...恥ずかしい」と下を向いて呟き、「比べないで」と心の中で叫んだ。

山本が「宇芽歌ちゃん、おっぱいちっちゃいけど、乳首の色とか形は良いかもな」と言い出し、岡崎が「だろ？ちっちゃくてもエロい可能性あるよな」と付け加えた。鈴木が「うわっ、岡崎言いすぎ！でもまあ分かるわ」と笑い、田中が「いや...ちょっと下品すぎない？」と苦笑いした。陽子が「ほんと下品だよ、いい加減にして」と怒ったが、山本が「陽子ちゃんも乳首見せてくれよ。巨乳の乳首ってどんなんだ？」とニヤつき、陽子が「ふざけんな、マジで」と睨んだ。

鈴木が「なあ、見て判断してやるから、おっぱい出してみなよ。宇芽歌ちゃんからな」と言い出した。「え、いや、無理ですって...やめてください」と宇芽歌が慌てて断ると、山本が「おお、照れてる！可愛いなあ！恥ずかしがんなよ」と煽り、岡崎が「いいじゃん、

ちよつとくらい見せろって！」と野次を飛ばした。佐藤が「ほら、仲間なんだからさ。ノリ悪いと浮くぞ」と笑い、田中が「まあまあ、そういうノリもあるし…」と曖昧に加勢した。陽子が「ちよつと、みんなやりすぎだよ！宇芽歌ちゃん嫌がってるじゃん」と声を荒げたが、鈴木が「陽子さんも出せばいいじゃん。比べたいし」とニヤつき、山本が「ほら、早くしろよ。見せろって」と圧をかけた。

宇芽歌は「嫌だ…見られたくない」と心の中で叫び、手が震えた。「無理…こんなの耐えられない」と涙が溢れそうだったが、先輩たちを無下にすると仕事に響く恐怖に縛られ、「どうしよう」と頭が真っ白になった。